Chapter 29 : **水と岩の過去 Part 1**

ハロウィンイベント中のインディーゲームの居心地のいい片隅で、カントー出身のイーブイの子たち3匹が、シャワーズのゲーム内の隠れ家に集まっていた。デジタル暖炉が揺らめき、ラベンダータウンの不気味なBGMが静かに響いていた。

シャワーズはブースターとサンダースの向かいに座り、どこか懐かしそうな表情を浮かべた。

「ねぇ、あたしがどうしてこの街、このゲームにいるのかって、考えたことある？」

サンダースが首をかしげる。「え？ 最高だからじゃないの？」

ブースターが肩をすくめた。「聞いたことないかもな、お前の話。」

シャワーズはどこか遠い目で微笑み、語り始めた。

「あたしの両親は、ここ出身じゃないの。ふたりともシンオウでイーブイとして生まれて──ママ、今はグレイシアだけど、停電の時に街を冷やすための氷技術を作るのが夢だった。パパ、リーフィアになったけど、すごい植物オタクでさ。植物のDNAとか、持続可能な食料を作る研究に夢中だったの。」

ブースターとサンダースが身を乗り出すと、シャワーズは続けた。

「ふたりが学生の頃、イッシュから来た留学生のゾロアと出会ってね。後にゾロアークになって、賞金稼ぎになったあの子。仲良くなって、結局ふたりはこっちに引っ越してきたの。ゾロアークも一緒に住んでたけど、自分の道は貫いてた。」

その口調が少し重くなる。

「こっちに来る時は船旅だったんだけど、その時にラプラスとスイクンに出会って、深い絆を結んだの。それがすべてを変えたの。」

さらに声を落として言った。

「数年後、スイクンは経済的にどん底に落ちて、自殺しようとしてたの。屋上から飛び降りる寸前だった。でも、たまたま近くにいたのが、うちの両親だったの。」

「パパはすぐに苔とツタでクッションを作って、ママは氷のスロープで彼女の落下を和らげたの。ふたりがスイクンの命を救ったの。」

サンダースの目が見開かれる。「マジで…？」

「そう。それからスイクンはママのアイスクリーム屋さんで働くようになったの。すごく頑張って、心も癒して…。それで、ある日──あたしがまだ子どもで、大きすぎるワッフルコーンを持って外に立ってた時、スイクンがあたしにみずのいしをくれたの。あたしがシャワーズになったのは、その時。」

ブースターが敬意を込めてうなずく。「お前の親、すげぇな。」

シャワーズはやわらかく笑った。「ほんとに、あたしの本当の両親なの。血の繋がった。ママはグレイシアで、アイスクリーム技師のパートタイム。パパはリーフィアで、植物研究のオタク。あたしを科学とおやつで育ててくれたの。ゾロアークは家族同然の親友。ほぼ叔母さんって感じ。」

ブースターが目を丸くする。「じゃあ、その氷のパワーって進化だけじゃなくて…育ちから来てんのか？」

「まあ、そうだね。」シャワーズがニヤリと笑う。「冷蔵庫の中と温室の間で育ったようなもんだから。変な幼少期だったけど、今のあたしを作った。」

サンダースがうなずく。「…正直、それ超かっけぇ。」

シャワーズは背もたれにもたれて、温かく誇らしげに微笑んだ。「伝説を救ったこともあるけど──あたしにとっては、全てを与えてくれた。」